

硬式庭球(テニス)部

里村 洋一

ゐのはなのキャンパスは、スポーツ施設に恵まれている。中でも、連絡道路の両側に位置する野球場、サッカー場、テニスコートは、回廊の桜が満開の時は言うに及ばず、春夏秋冬、学生のみならず訪れる人々に「ここも大学の一隅」かと心に感動を与えている。ここで育ち修練を積んだ学生たちの多くが、その後の社会での活動の、大切な心のよりどころとしてきた。

硬式テニス部もこの恵まれた環境に育まれて、およそ90年に近い歴史を歩んできた。その歴史を振り返り正確な記録を残すのは、今に生きる我々の務めであろう。本書の発刊に際して、その役割の一端を担うことになったのを光栄に思い、粗相なく役目を果たしたいと思う。すでに、医学部100周年記念事業に際して、高見澤裕吉（教授 産婦人科 昭和27年卒）が精力的に資料を集め、足を運んで、当時健在であった昭和初期の先輩たちを訪ねて話を伺い、大正末期から昭和52年までをまとめ上げた力作がある。そこで、今回は、その百年誌の記事の概略を紹介した上で、昭和50年代以後の歴史を付け加える形で述べたい。幸い、後で紹介するように、硬式テニス部には「蒼庭」と題する年誌があり、昭和39年の第1号以来今日まで、学園紛争時の1年を除いて毎年、現役部員と先輩をつなぐ太い糸をより合わせてきた。昭和50年以後の出来事や戦績をたどるにはこれが何よりの頼りである。

テニス部の歴史は、大正末期にさかのぼる

初代のテニス部長は小児科の小山武雄（教授）であったという。就任が何年であったのか定かではないが、大正14年に退任されて、杉山文祐（教授 産婦人科）が二代目となったと、岩津俊衛（産婦人科教授 第三代部長）が「蒼庭」1号で述べている。どうやら、当時の主流は軟式であったらしく、職員、学生の区別なく、また、テニスコートも固定の場所がなく構内の空き地を転々としていたという。

硬式テニスが定着したのは、丸山吉夫（昭和3年卒）らの熱意ある活動によってである。丸山は新潟高校のナンバーワン選手で、本学入学後に同輩や先輩の技術指導に当たり、部としての体制も整えた。

硬式テニス部の事実上の創始者とされている。

昭和3年に赤松茂（教授 医化学）が第四代部長に就任すると、その活動のおかげで、昭和5年に大学の施設として現在のテニスコートのある場所（凡秋谷）にネットフェンスと部室も設備された5面が造成された。コート開きには、デ杯日本代表の清水善造氏（世界的な名プレイヤーとして知られる）らを招いた。これを機会に、優秀な人材が次々と集まり、岡田長豊（昭和8年卒）、佐藤幸雄（昭和9年卒）、らが四高（金沢）の出身者であったことから、昭和6年から金沢医大との定期戦が始まった。千葉医大のテニス設備とその環境は当時としては国内でも出色のものであって、関東一円の大学やクラブとの交流も行われるようになった。また、昭和12年から東北大との定期戦が開始された。当時の千葉医大は、野球やサッカー、ボート、柔道、剣道などのさまざまなスポーツクラブも隆盛で、百花繚乱の感があったという。

しかし、世界情勢は不穏で、この年に日華事変が起これ、次第に戦線が拡大、それに伴ってテニス部の活動も制約を受けるようになった。昭和16年について太平洋戦争へと突入すると、野球やテニスは敵性のものだと見られるようになり、物資も不足してボールも手に入らなくなった。そんな中、17年5月には仙台に遠征し、東北大との定期戦が行われた。これを最後にテニス部の活動は事実上不可能になった。ネットフェンスの鉄材は兵器製造の資材として供出された。昭和20年には千葉市が空襲で焼け野原となり、コートは放置されて、あちこちに防空壕が掘られ、ついには食糧難に耐えるための芋畑へと変わった。また、多くの若い先輩たちが戦場に散って行った。

テニスコートの再建からテニスブームの時代へ

終戦の翌年、昭和21年2月に学生自治会が開催され、運動部の再編が論議された。本間三郎（昭和21年卒 後に教授 生理学）、清水健三、田中実（昭和22年卒）らが、テニス部復活を提案、部員募集をおこなった。これに呼応した伊藤力（昭和23年卒）ら5人が加わって、芋畑を掘りなおしにかかり、面

第5章 交友の広がり

なおし、ローラーがけ、計測を自分たちで行い。テニスコート2面を再生した。慈恵医大のチームを招いてコート復活を祝った。この年、小林龍男（教授薬理学 昭和7年卒）が部長に就任した。

22年には関東学生連盟が発足、二部に登録された千葉医大は慈恵医大、明大、東京工大と対戦することとなった。24年には関東学生リーグとは別に医大リーグが創設され東大、慈恵医大、順天堂大、東京医大、東京医科歯科大、千葉医大の6大学でリーグ戦が始まった。千葉医大は24、25年と連覇を果たした。26年、大学の協力を得て、コートの整備が行われ、学生と大学職員の共同作業でネットフェンス付きの2面を完成させた。この年には、東北大学との定期戦も復活、さらに27年には、対金沢医大定期戦も復活し戦前の隆盛期の形が再現できるまでになった。翌28年には、第一回の関東医科学生総合体育大会が新潟大主催で開かれている。当時の医科学生のテニスのレベルは相対的に高いものがあり、高見沢裕吉（昭和27年卒）、大原一夫（昭和29年卒）組は、関東学生新進トーナメントで優勝するなど、医学生の範囲を超えて活躍している。こうして、戦後のテニス部の基盤が固められるとともに、環境も整えられたので、新しく入部するものも多くなった。コートが2面では不足してきたので、さらに南側に2面の増設が行われた。世の中は戦後の復興が進み、ようやく食糧難が解消されてきていたが、住宅事情はなお劣悪で、コートサイドに建てられていた小屋には、下宿代わりに住み込む部員もあった。前記の清水健三、田中実もそのひとりであり、そのあとを、井上正士（23年卒）、河合正計（26年卒）、高見沢裕吉（27年卒）、大原一夫（29年卒）らが引き継ぎ、その後も、昭和40年に部室の改造が行われるまで、部員の誰かが住みこんでおり、これもテニス部の伝統的活動の一つとなっていた。

昭和30年代に入ると、それまで稲毛の文理学部キャンパスで活動していた医学進学課程の学生もものはなのコートでプレイするものが多くなり、部員数が増えてきた。

折から、明仁親王（今上天皇）と美智子さまのご成婚（昭和34年）がテニスにまつわるものだったことで、世の中には一気にテニスブームが巻き起こった。筆者の入部はそのご成婚の翌年のことであり、80人の新入生のうち、なんと15人もが部員として登録された。

ご成婚の一年前の33年には、医学部1学年に5～6人しかいない女子学生からも入部者があった。奥野（永山）恵美子、田中（富岡）容子（昭和39年

卒）の二人である。3年おいて、青木（関）美千代、山田（林）益子（昭和42年卒）の名選手が、さらに古池（萩巢）敏子、藤原（吉井）田美子（昭和44年卒）の強力なペアが続いた。1963年から68年の6年間で関東医科歯科リーグと東日本医科学生の大会で合計6回の優勝、3回の準優勝という好成績をあげて、女子部のスタートはそのまま黄金期の到来となった。

一方、男子は、他大学のレベルが向上して苦戦を強いられていた。当時、隆盛期を迎えて、不敗を誇った順天堂大学や名選手の輩出した慶応大、日本医大などに押されて、関東医科歯科リーグ（以下、リーグ戦）の中堅は確保してはいたものの、矢野柊多（昭和34年卒）、大森忠昭（昭和39年卒）、小野田昌一（昭和40年卒）のような名選手を擁してもなお優勝のチャンスには恵まれなかった。そのような中で、昭和38年の東日本医科学生（以下、東医体）での準優勝は久々の快挙であった。

このころ、千葉県内には、硬式テニスでチームを編成できる団体が極めて少なく、千葉大学の他には、津田沼のエバーグリーンクラブ、県庁クラブ、佐倉の臼井クラブ、川崎製鉄テニスクラブの四つを数えるのみであった。医科学生以外の選手と対戦する機会の少なかった部員達には、これらの社会人プレーヤーとの接触は貴重な機会であった。特に川崎製鉄には、我々のレベルを超えたスケールの大きな選手が何人もおり、彼らとの親善試合はテニスの世界の広さを実感できるよい機会であった。エバーグリーンの鳥井利夫氏は千葉県テニス協会設立の立役者で、県内のテニス興隆に熱意をもって取り組んでいた。昭和25年ころから、毎年秋に千葉オープントーナメントを開催しており、県内だけでなく東京や神奈川からも参加者が多かった。当テニス部も県協会からの要請で、トーナメントの運用に部員を派遣して協力した。アルバイトとしての収入はわずかではあったが、日本のトップ選手たちのプレイを目の前に見る機会は貴重なものであった。一時は、千葉オープンの運用をほとんど任された状態となっていたが、昭和40年代になって、医学生間の行事に重点が置かれるようになり、県協会との関係は次第に希薄になっていった。

しかし、その後しばらくして、卒業生たちが社会人として協会の活動に参加するようになり、平成に入って重要な役割を担いはじめた。高見沢裕吉は、早くから副会長の席にあったが、平成5年に千葉県テニス協会の五代目会長に就任して以来、現在まで協会のトップとして活躍している。また、里村洋一

は平成元年から16年にわたって副理事長を務めた。

蒼庭会の成立と会誌発行

話は遡るが、昭和29年に群馬県で開業していた田島一彦（昭和17年卒）の世話で、群馬県四万温泉で4日間の夏期合宿が行われるようになった。暑い下界の千葉を離れての合宿は快適で、また、先輩たちの参加もあり、千葉での厳しい練習とは違った和気あいあいの雰囲気満ちて、当時のテニス部員達には忘れえない思い出を残した。この年中行事は学園紛争の起こった昭和43年まで続いた。当時の夏休みには、公衆衛生学の実習が学部4年生に義務付けられており、グループを組んで約1週間地方の診療所や病院に滞在した。ほとんどが長野県で行われたが、テニス部員の多くは熊谷信夫（昭和28年卒）を頼って、須坂病院を選び、ここでも先輩たちと一緒にプレイを楽しんだ。

盛んになった現役部員とOBとの交流を一層密なものにする目的で、現役学生と卒業生からなる新しい組織を作ることとなり「蒼庭会」と命名された。昭和34年のことである。その後は、毎年春と秋の2回、蒼庭会の定例大会が行われ、先輩たちが母校のコートを訪れて現役部員とのプレイを楽しむこととなった。この伝統は、学園紛争のための一時中断はあったものの、今日まで50年にわたって連綿と継承されている。

昭和39年に会誌「蒼庭」の第1号が発刊された。当時のキャプテン小野田昌一、中村泰久（昭和40年卒）らの努力によるもので、ガリ版刷りながら岩津俊衛名誉教授や小林龍男部長の写真が張り付けられた豪華版である。発刊に際して小林部長は「先輩と現役の意思疎通をはかるうえにも、部の記録を残すうえにもきわめて意義深いものと思われる」と述べている。その言葉のとおり、その後の45年間に44冊が発刊され、先輩・現役のそれぞれの想いや思い出が語られるとともに、毎年の戦績が詳しく掲載されて、立派な地誌の感を呈している。

昭和40年、築35年を経過し、長年にわたって部員の住居ともなっていた部室の小屋も老朽化し、雨漏りが激しくなったので、当時のキャプテン劉浩志（昭和42年卒）が中心となり、小林部長、福岡誠吾監督、高見沢裕吉講師らが相談して、先輩からの寄付金を募集した。現役学生のアルバイト収入を合わせて50万円を超える資金が集まり、見事な改修が行われた。物置同然の小屋から、男女別の更衣室に水洗トイレ、シャワー室まで備えた立派なクラブハウ

スが誕生した。これも当時の先輩と現役の強固なつながりの成果であった。残念なことに、昭和52年、生物活性研究所の建設に伴い、コート3面の造成とともに取り壊されることとなった。クラブハウスは10年余の短命に終わり、その後恒久的な建物は建てられていない。

第二、第三の黄金時代

昭和43年から44年は動乱の年であった。学園紛争のあらしが吹きわたり、東大では安田講堂を占拠した学生と警官隊との攻防が繰り広げられた。のびやかなキャンパスでも記念講堂に立てこもって1カ月にわたって籠城した学生グループがあった。学内は騒然として、蒼庭会の行事も会誌の発行も一年間は中止となった。しかし、テニス部への入部者は絶えることなく、紛争が一段落すると、一段と熱の入った練習が行われるようになった。この前後に入学したクラスが、大活躍をして、昭和20年代を第一の黄金期と数えれば、彼らが第二の黄金時代を築き上げた。木村秀樹、蛭名洋介（共に48年卒）、青柳博（49年卒）、野村文夫（50年卒）、中村千里（51年卒）、岩田次郎（52年卒）と、それぞれ当時の関東の医学部学生としてトップを争う名選手であった。昭和47年（1972）から昭和51年（1976）までの5年間で、東医体で3回の優勝、リーグで2回の準優勝を成し遂げている。彼らは、医学部だけではなく千葉大学の代表選手としてもトップを担っていたので、西千葉の学部にも所属する選手たちもしばしば医学部のコートでの練習に参加した。また、昭和50年に看護学部が開設されて、同学部の学生が医学部の練習に参加するようになり、以後は、両学部の硬式テニス部が一体となって活動している。その第一号の学生が渡辺泰秀（昭和54年卒）で、彼をはじめ、その後の看護学部学生たちが卒業後も蒼庭会の一員として毎年の行事に参加している。

この時期は、テニス部内の恋愛も華やかで、4年間に4組のカップルが誕生した。三浦部長は仲人としても多忙であった。岩田次郎と坂本裕子（共に昭和52年卒）の夫婦には、間もなく長男岩田曜（平成14年卒）が誕生し、長じて医学部のテニス部員となり平成11年のキャプテンを務めた。政治家の世襲が話題になるこの頃であるが、世代を超えてのこの継承は好意を持って迎えられた。ついでに親子二代のテニス部員を挙げておく、蛭名寿家夫（昭和16年卒）蛭名洋介（昭和48年卒）、柏戸（岩崎）正英（昭和33年卒）柏戸孝一（平成6年卒）。

第5章 交友の広がり

昭和52年以後4～5年間のやや後退した時期を過ぎて三度目の黄金期を迎える。三浦義彰部長が退官し高見沢裕吉部長が就任した翌57年、朝長毅（昭和59年卒）キャプテンの率いるチームが、リーグで優勝、東医体で準優勝を飾った。このチームでは、島田英昭、下田司（昭和59年卒）、橘川嘉夫（昭和60年卒）のほか、後述の鬼頭、菊池らが活躍した。さらに翌年はリーグ戦準優勝、東医体優勝、翌59年は両大会準優勝、そして60年には二宮栄一郎キャプテンの下に両方に優勝と初めての快挙を成し遂げた。高見沢部長は自宅の庭を開放して祝賀会を催した。これ以後、千葉大学は東日本の医学部では常勝のチームとして評価されるようになった。昭和60年優勝時のレギュラーメンバーを以下に挙げる。太田岳洋、芹沢徹、菊池浩之、鬼頭浩之（昭和61年卒）一瀬雅典、二宮栄一郎、篠塚典弘（昭和62年卒）、池田義和（平成元年卒）。キャプテンの二宮は、翌年の蒼庭に、優勝は「こんな戦力で……」という意外な結果で、それをもたらしたのはチームの結束力と、部員たちの応援であったと書いている。その後も、常に上位を維持してリーグでは常に2位から3位、東医体では優勝か準優勝といった戦績が続き、この黄金期は平成4年のリーグ戦3位、東医体優勝（網代洋一（平成6年卒）キャプテン）まで10年間の長期にわたった。

この後、数年間、やや低調であったが、平成10年には、再びリーグと東医体の両方を制覇した。平成10年の優勝メンバーは、川村幸治、鈴木崇根、佐々木恒（平成11年卒）、田中宏明、国司俊一（平成13年卒）らである。

昭和40年代の活躍以来、男子の影に隠れて比較的地味な成績で推移していた女子部も、昭和63年の野崎（田口）奈津子キャプテンの頃から、次第にリーグ戦でも頭角を現し、63年に三部昇格、3年後の平成2年には二部へあがり、平成4年には一部昇格、同年、東医体準優勝と男子の成績に負けず劣らずの成績を上げるまでになった。この間に活躍した選手を挙げておく。野崎（田口）奈津子、正岡（浜野）ナナ子（平成元年卒）、渡辺（国府田）桂子（平成2年卒）、加藤絵里（平成4年卒）、市川（佐伯）美奈子（平成5年卒）、長谷川（笠川）規子、福田（清水）サラ（平成6年卒）、内倉（横山）暁子（平成7年卒）

昭和61年、第13回全日本医師テニス大会が高見沢裕吉を大会長として千葉県で開催された。全国から約200人の医師テニスプレーヤーが天台の県営庭球場に集まったが、雨天に見舞われ、当時のクレーの

みの16面ではスケジュールを完遂することができなかった。朝長毅（昭和59年卒）が一般シングルスで優勝している。

それから9年後の平成7年、第22回の同大会が、清水健三を大会長として東金のエストーレホテルアンドテニスを会場に開催された。いずれもテニス部学生協力によって運営された。このときは、中村千里（昭和51年卒）が一般シングルスとダブルスの両方で優勝、里村洋一（昭和41年卒）が55歳以上クラスBシングルスで優勝した。ちなみに、第38回大会が平成22年に千葉県で開催されることが決定している。

不祥事を越えて

千葉大学の好成績が続いた関東の医科学生テニスの世界では、平成に入る頃から好ましくない風潮が起きていた。チームが好成績を上げるには、個々の選手の能力も大切だが、団体戦におけるチームの結束力とその表現としての周りの応援がキーとなる、との認識がいきわたり、応援合戦がエスカレートした。リーグ戦や東医体のようなチームの威信をかけた大学間の対戦では、大勢の部員がコートを取り巻き、1ポイント1ポイントに激しい声援を送った。ポイントが決まるごとに、味方の選手をたたえればかりでなく、相手の選手を揶揄する応援団がひとしきり騒いで、次のポイントが開始されるまでに時間がかかる。このため、1つの3セットマッチが数時間に及ぶことが常態となり、しばしば、予定された対戦を一日で消化できず、改めて対戦日を設定する必要があるようになった。聞くところによると、西日本の医科学生の特ニスにも同様な傾向が見られたという。部員たちにも、行きすぎだという自覚はあったようだが、相手チームの応援に負けられないとの強迫に抗しきれなかったようである。

このような雰囲気の中で、決定的な事件が起こった。平成14年の2月のことである。未消化となっていたリーグ戦の対筑波大の試合が本学の凡秋谷コートで行われる予定の前夜、部員たちがひそかにコートに水撒きをした。出場予定の選手がそろわない状態での対戦を避けるための苦肉の策で、筑波大学には、降雨によるコート不良のためとして、スケジュールの延期を申し入れた。不審に思った筑波大学の抗議によって運営当番大学が調査したところ、この工作が露見して千葉が不正をしたとの追及を受けた。この事情を医学部教授会に報告するとともに、詳しい事情を調査したところ、部員たちが嘘の

降雨を裏付けるための更なる工作を他学部の教官に依頼した事実も判明し、将来の医師としてあるまじき行為を生んだテニス部活動（男子部に限る）はただちに中止すべしとの厳しい決定が下された。これを受けて、男子部は自主解散の形で活動を停止した。ここに硬式庭球部の80年の歴史が途絶えることとなったが、幸いなことに女子部がこの事件には関与していないとして存続が許され、伝統はかろうじて維持されることとなった。

この事件の責任をとって里村洋一部長は退任、女子部の部長として税所宏光（教授 第一内科 昭和40年卒）が就任した。蒼庭会も新たな体制を整える必要があるとの認識に立ち、規約を改定して会長をそれまでの硬式庭球部長から、会員互選によってOBから選ぶこと、幹事会を組織して重要事項を審議することなどを決めた。初代の会長には高見沢裕吉が選ばれた。

女子部は、それまで男子中心に運用されてきた活動のほとんどすべてを引き継ぎ、これまでどおり粛々と実行した。リーグ戦や東医体の他に、金沢大学や福島大学との定期戦、春秋二回の蒼庭会、夏期合宿、会誌「蒼庭」の発行などが滞りなく行われた。

平成18年、事件から4年を経過した時点で、事件以後の入学者には活動の機会を与えてもよいのではとの意見が大学当局に受け入れられて、男子部が新たにスタートを切ることとなった。それまで同好会の形で活動していた学生たちが、新生のテニス部に加入して正規の部活動を始めた。関東医科歯科リーグも再加入を認め、六部最下位からの出直しである

が、対校戦への出場が可能となった。それからの勢いには目を見張らせるものがある。初年の平成18年には六部優勝、五部昇格、翌年には四部に次の年には三部にと毎年昇格し、平成21年の春には三部でも優勝し来年の二部昇格がすでに決まっている。堰を切ったようなこの快進撃は、千葉大学のポテンシャルが如何に高いかを象徴している。新しく就任した島田英昭監督（昭和59年卒）は部員のマナーや倫理に厳しく目をやっており、不祥事を招いた背景が再現することのないよう指導している。

苦難の時期を支えた女子部は、その苦勞が報われたと言ってよいか、平成17年から目覚ましい戦果をあげるようになった。同年に東医体の準優勝、翌年にはリーグの三部優勝と東医体の優勝を重ね、平成19年にはリーグ一部に昇格、東医体優勝、20年にはリーグ一部準優勝、東医体は3年連続の優勝を飾り、これらが評価されて、千葉大学学長の表彰を受けた。まさに女子部の第3の黄金時代が到来している。

おわりに

大正末期から今日までの硬式テニス部史を略記した。時代は移り、人は変わり世相もテニスも変化した。この凡秋谷のコートで培われた大学生たちの心と体は、彼らの生涯の糧となってきた。挫折を乗り越えて再生した硬式テニス部は、これからも新しい人を生み、人を育てる役割を担い続けるものと思う。

（さとむら よういち）